西寺山古墳（2次）

2008.2

岐阜県 可児市教育委員会

西寺山古墳（2次）

2008.2

岐阜県 可児市教育委員会

例　　言

1．本書は、岐阜県可児市中恵土字寺廻1944番における西寺山古墳（21214‐04763）の緊急発掘調査報告書である。発掘調査は、平成16年度（平成16年12月13日～平成17年２月21日）に実施している。

2．西寺山古墳は、寺院本堂の建て替えに伴うもので、遺構残存の有無や範囲を確認するための試掘調査により遺構が確認されたため、引き続き本調査を実施したものである。調査面積は合わせて約80㎡である。

現場調査及び整理作業は、いずれも可児市教育委員会が直営で実施した。

3．発掘調査の体制は、次のとおりである。

教　育　長　　井戸　英彦

教 育 部 長　　武藤　隆典（平成16・17年度）　大澤　正幸（平成18・19年度）

文化振興課長　藤田　禮三（平成16年度）　　山口　　哲（平成17～19年度）

文化財係長　　長瀬　治義

調査担当者　　吉田　正人

調査補助員　　成尾　孝子　　本田　博志　　水野テツ子

作　業　員　　押井　正行　　可児　定夫　　香田　公夫　　五木田かち子　　土田晃司

4．本調査の現場担当者は吉田であり、現場の写真については彼の手による。得られた調査成果については全て彼の業績であるが、彼の急逝を引き継ぎ、本書の編集と執筆は長瀬治義が行った。また、遺構関係図面のトレースは吉田、長瀬が、遺物の実測とトレースは成尾孝子、本田博志、長瀬が、遺物の写真は長瀬が担当した。

5．発掘調査に当たっては、次の方、関係機関にご協力を賜りました。記して謝意を表します。

丹治真一様　　弘福寺様　　壇家の皆様

6．調査記録及び出土遺物は、可児市教育委員会（可児郷土歴史館）で保管している。

目　　次

第１節　調査の経緯……1
第２節　遺跡の立地と環境……5
第３節　検出した遺構……8
第４節　出土した遺物 ……15
第５節　まとめ ……20
図　版 ……27
報告書抄録 ……39

第１節　調査の経緯

１．試掘確認調査の経緯と経過（図１～３）

調査原因は、可児市中恵土字寺廻1944番における寺院本堂の建て替えである。現在の寺院本堂は、西寺山古墳の墳丘南側にあり、前方部から後方部にかけての墳丘の一部を、墳端近くまで盛土を完全に削平して整地し、建設されている。また、後方部の北側も最近まで民家が建っており一段目が削平され、前方部においても古く県道建設の際に土取りが為されたと言い、ほとんどが削平されている。

平成10年に実施した、第１次調査における各所の遺構検出状況（墳端レベル）から判断すると、墳丘削平後の整地面の下に、古墳の墳丘裾部分が残存していることも十分考えられた。このため、遺構の残存の有無とその範囲を確認することを目的とし、事前に試掘調査を実施することにした。

試掘調査の期間は、平成16年12月13日～平成17年１月31日で、調査面積は約40㎡である。試掘調査の結果については、平成18年３月刊行の『可児市市内遺跡発掘調査報告書』に掲載した。概要を示せば、墳丘及び葺石の残存状態、遺物の有無や土層の状況を確認するため、バックホーと人力により３本のトレンチを掘削し精査した。試掘調査の段における３本のトレンチは、それぞれ東側トレンチ、中央トレンチ、西側トレンチと呼んだ。

その結果、古墳の盛土はほぼ全て削平されていたが、３本のトレンチ南部分からはいずれも葺石の転落とみられる川原石が検出され、その間隙からは共に転落した二重口縁壺形埴輪の破片や、中世の山茶碗片が出土した。この転落石を徐々に取り除いていくと、原位置を保つ状態の川原石群（墳端部の葺石）を検出するに至った。これにより、墳丘の裾部分はなお遺存しているものと判断し、諸手続きを経て、工事予定範囲内において可能な限り追求すべく、本発掘調査として継続することにした。

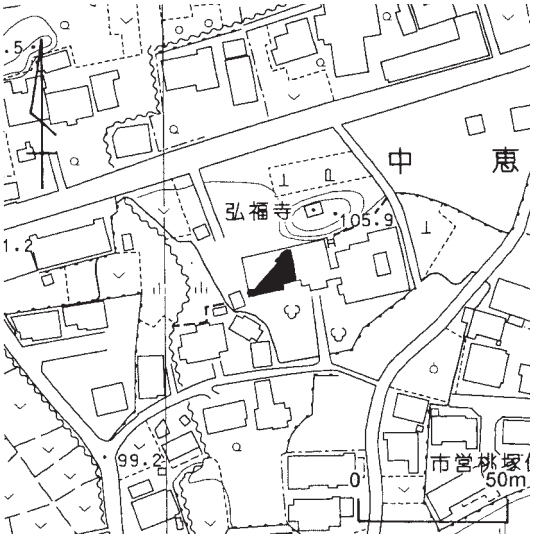


図１　調査場所位置図

調査は、試掘確認・本発掘共に吉田正人が担当した。

関係法令等に基づく試掘確認調査の手続きは、次のとおりである。

原因者発	平成15年６月25日付	県教委宛	埋蔵文化財発掘届
市教委発	平成15年７月３日付	教文振第70号	同届進達
県教委発	平成15年７月７日付	教文第31号の22	原因者宛　指示通知
市教委発	平成15年７月15日付	教文振第85号	原因者宛　伝達
市教委発	平成17年２月４日付	教文振第163号	県教委宛　試掘調査終了報告書

２．本発掘調査の経緯と経過（図３・４）

本発掘調査は、試掘確認調査に引き続き平成17年２月１日～２月21日まで実施した。本調査は、試掘調査による３本のトレンチを拡大する形で実施し、遺物の取り上げを考慮して調査位置により、第１トレンチ～第５トレンチと呼称した。試掘調査の段の東側トレンチは第１トレンチに、中央トレンチは第３トレンチに、西側トレンチは第５トレンチに当る。

第１次調査の結果において推定された墳端ラインを基に、墳端付近を中心として調査区を設定した。その結果、既に試掘段階において、墳丘南側のくびれ部から前方部先端に向かう墳端ラインは、推定ラインよりもやや南に開くことが判明し、本調査段階においては調査区を多少修正している。

本調査の段は、取り壊された本堂部分において、本堂基礎として盛土整地された土層を重機により除去しつつ遺存する遺構面直前までを掘り下げ、それ以後は手作業により精査した。本調査面積は約40㎡で、試掘面積と合わせ約80㎡である。

これにより、既に削平されている西寺山古墳の前方部南側の墳端ラインを、葺石基部から調査区全面で確認できた。また、調査区の中央付近では、葺石の途切れと地山整形の状態から墳丘へ入る墓道が確認でき、転落した二重口縁壺形埴輪の破片も多数出土した。更に、葺石石材を利用した中世墓の石組遺構（多数の山茶碗を伴う）や、中世の暗渠排水溝も検出できた。

発掘調査後の平面図や断面図は、業者委託による写真実測（撮影縮尺１／200、図化縮尺１／20）で作成した他、土層や葺石の断面図（１／20）の一部は手書きによって図化した。

なお本調査終了後は、検出した墳端部付近の葺石や遺構面を保護するため、土嚢を敷き詰めた後に埋め戻している。

本発掘調査に係る法令手続きは次のとおりである。

市教委発	平成17年２月７日付	教文振第164号	県教委宛	発掘調査着手の報告
県教委発	平成17年３月４日付	教文第35号の21	市教委宛	調査慎重実施の通知
市教委発	平成17年２月24日付	教文振第166号	県教委宛	発掘調査終了報告書
市教委発	平成17年２月24日付	教文振第167号	原因者宛	発掘調査終了の報告
市教委発	平成17年２月25日付	教文振第168号	可児警察署宛	埋蔵物発見届
市教委発	平成17年２月25日付	教文振第168号	県教委宛	埋蔵物保管証
市教委発	平成18年６月20日付	教文振第67号の11	県教委宛	出土文化財譲与申請
県教委発	平成18年７月13日付	教文第138号の17	市教委宛	出土品の譲与通知

なお、西寺山古墳は昭和59年に市教委が測量調査して前方後方墳と認識し、平成10年に行った第１次試掘確認調査で、墳長60mの前方後方墳であることが確認されている。今回の緊急調査は第２次調査となる。

参考文献　可児市教育委員会『可児市市内遺跡発掘調査報告書』2006
可児市教育委員会『前波の三ツ塚』1999

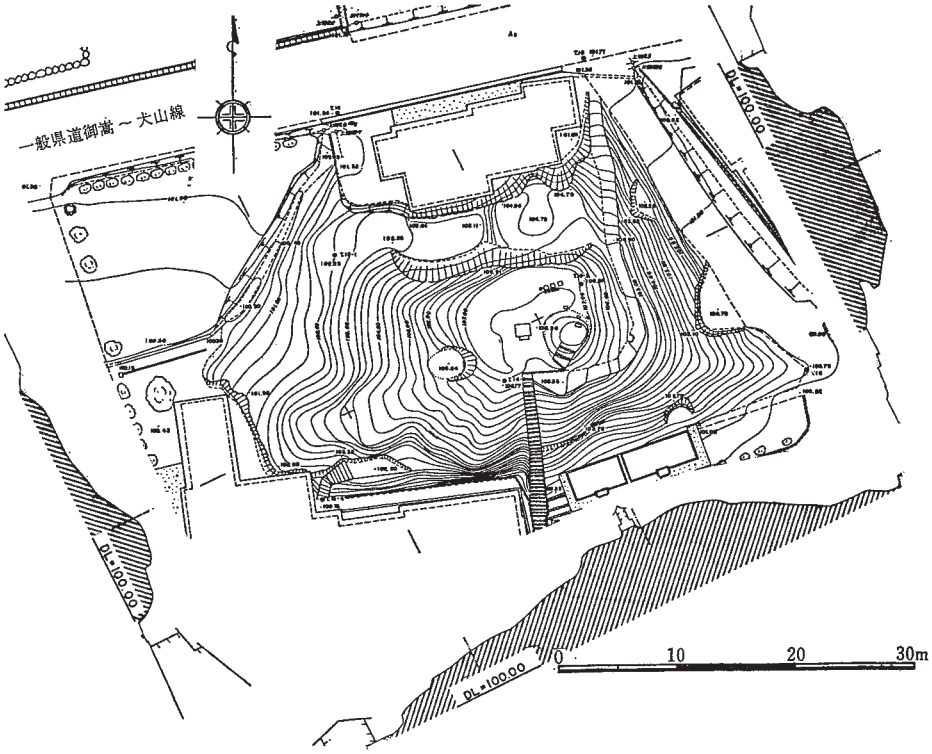


図２　西寺山古墳現況図（S.59 測量）

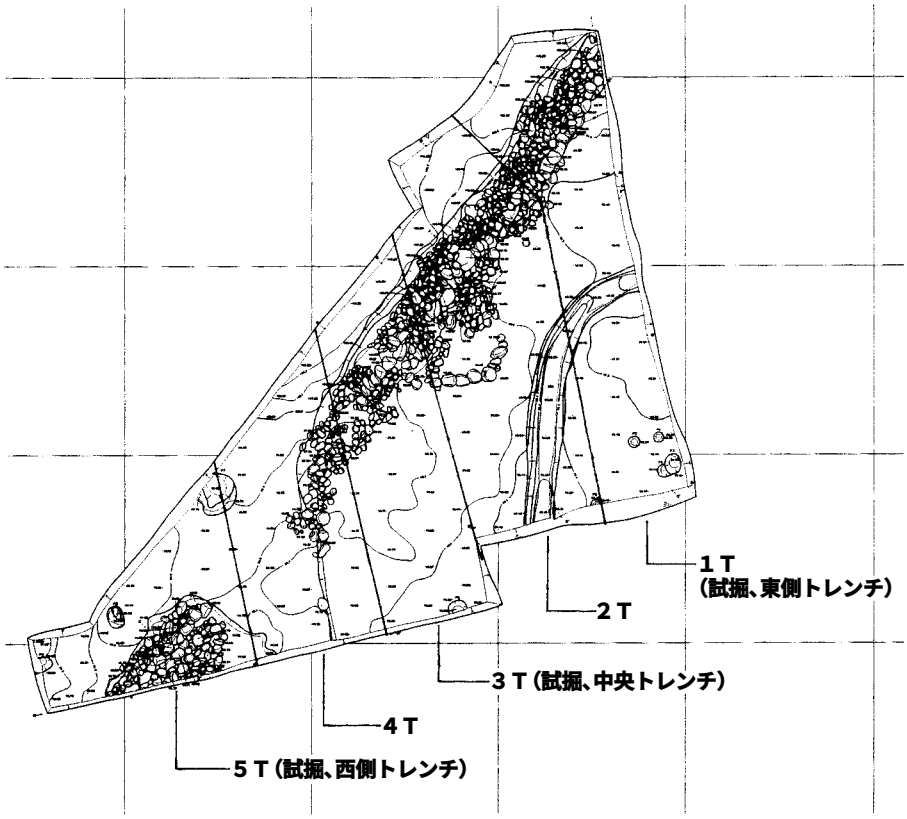


図３　調査区区割図

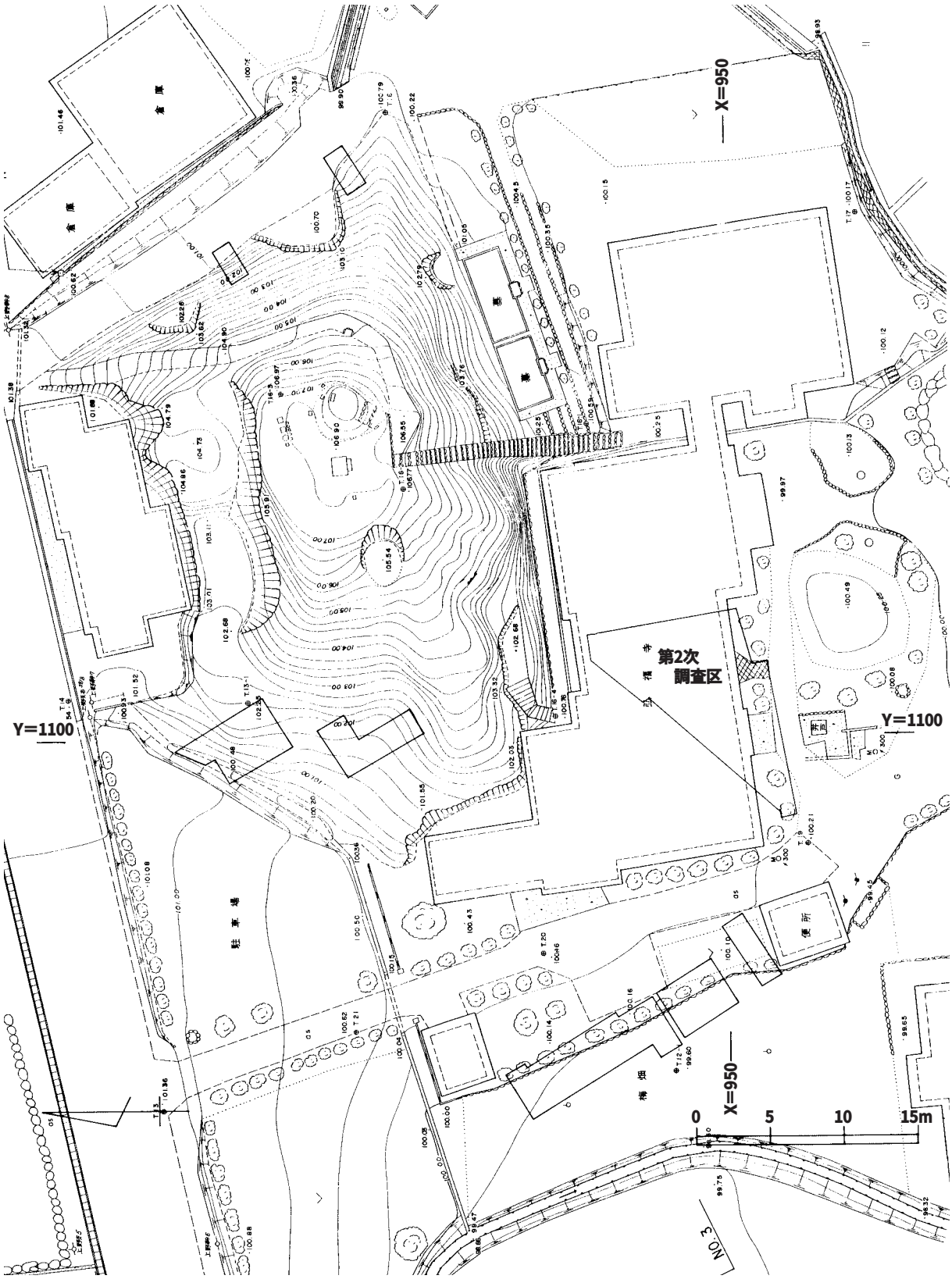


図４　西寺山古墳トレンチ配置図

第2節　遺跡の立地と環境

１．立地と環境（図５・６）

西寺山古墳は、行政区として岐阜県可児市中恵土字寺廻1944番を代表とし、現況は残丘として弘福寺の境内に所在する。当地は、木曽川が形成した平坦な中位段丘面の南端に位置し、その南側には可児川が形成した沖積地が東西に延びる。本古墳の葺石の石材として利用された、川原石の入手には格好な選地状況と言える。

この中位段丘面、可児市中恵土地内には、古くから「前波の三ツ塚」と呼ばれる地域の首長墳３基が占地している。墳長72mで周濠を有する国史跡長塚古墳（前方後円墳）と、墳長62mで周溝を有する野中古墳（前方後円墳）、そして墳長60mの前方後方墳である市史跡西寺山古墳である。長塚古墳の史跡拡大と将来の整備を目的として、平成７年度～10年度にかけて実施したこれら「前波の三ツ塚」の発掘調査の結果、これらの首長墳の築造順は西寺山古墳→野中古墳→長塚古墳であろうと考えられた。このうち西寺山古墳については、平成10年度に調査を実施（第１次調査）している。

また、東に隣接する御嵩町方向へ２㎞程目を向けると、高位段丘上には墳長約41mの東寺山１号墳（前方後方墳）と墳長約58mの同２号墳（前方後方墳）、そして丘陵端部に墳長約42mの高倉山古墳（前方後方墳）が選地している。伏見古墳群と呼ばれ、これら３基の築造順については高倉山古墳→東寺山１号墳→同２号墳であろうと考えている。

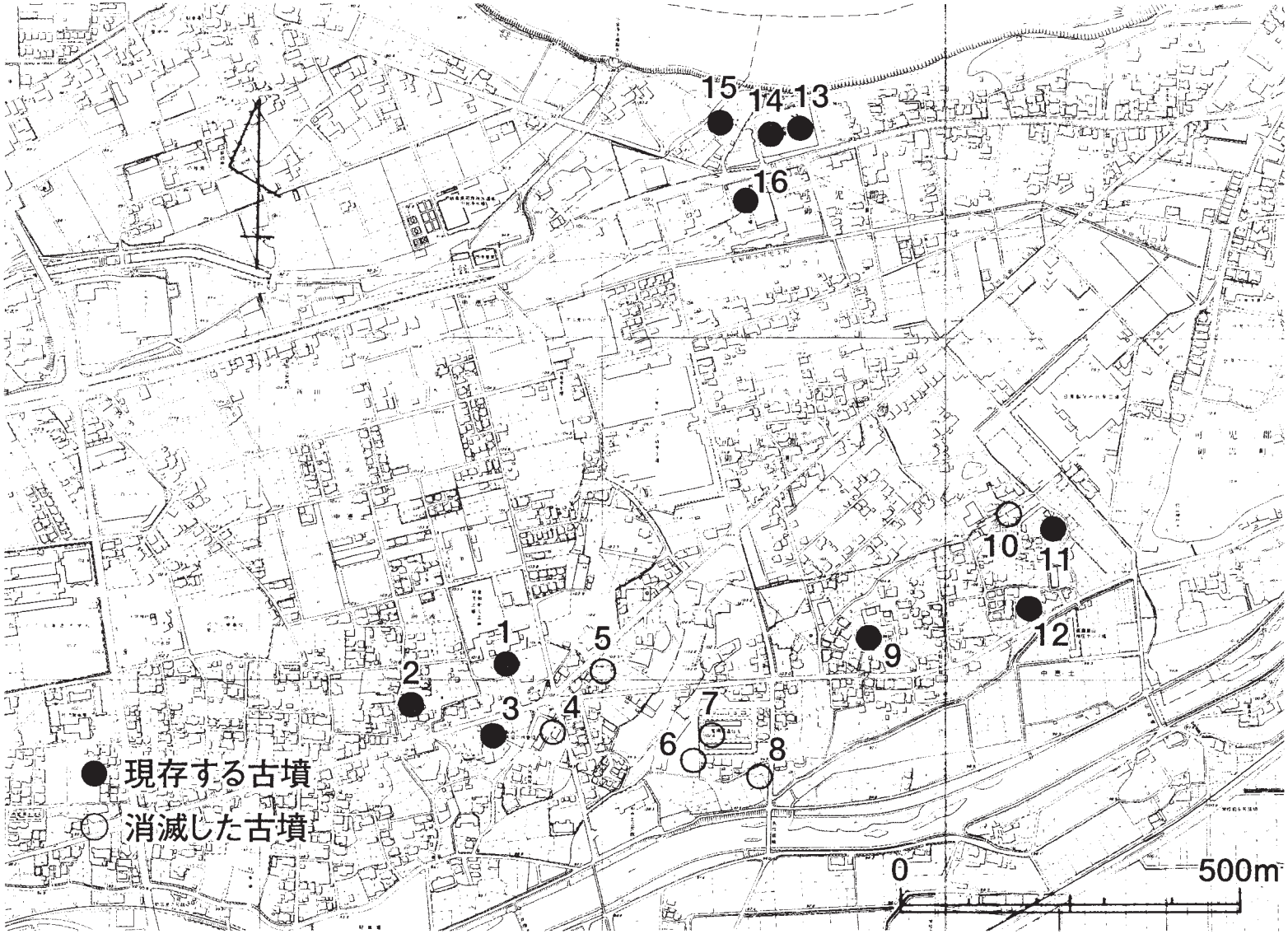
実に前方後方墳の割合が高い地域である。これら６基の首長墳は全て前期の中に位置づけられ、高倉山古墳を初現として、その後は二系列で並列するものとみている。この二系列は、最後に築かれた長塚古墳被葬者の下で一元化されたものと推定されよう。

また、これらの首長墳を取り巻くように、東西2.5㎞程の内に前期（一部中期か）に位置づけられる大型の円・方墳も従属的に点在する。身隠山白山古墳や同御嶽古墳、上野桐野古墳、上野柿の木塚古墳、上野稲荷塚古墳、清水経塚古墳、伏見大塚１号墳などである。

このように当地区は、可児地域、否、濃尾地方においても前期古墳の密集する重要な場所として注目されている。

また、西寺山古墳から東へ300m程度の、柿の木塚古墳があった周辺には欠ノ上遺跡が所在する。弥生時代後期～古墳時代中期に至る住居址が検出されており、前波の三ツ塚との関連も大いに推測できる。

参考文献　可児町教育委員会『欠ノ上遺跡発掘調査報告書』1979
長瀬治義「岐阜県東濃地方の前方後方墳」『古代』第86号　1988
可児市『可児市史』第１巻　通史編　考古・文化財



1.長塚古墳
2.野中古墳
3.西寺山古墳
4.桃塚古墳
5.御妃塚古墳
6.銭塚古墳
7.柿木塚古墳
8.道下古墳
9.上野稲荷古墳
10.桐野2号墳
11.桐野1号墳
（首吊塚古墳）
12.山神古墳
13.菜が畑号墳
14.長畑2号墳
15新町古墳
16.浦畑古墳
※首塚、足塚両古墳については、追跡不能で所在地は不明である。

図５　前波の三ツ塚周辺の古墳分布

図６　前波の三ツ塚測量図（S.57 野中　S.59 西寺山　S.61 長塚）

第3節　検出した遺構

１．層　序（第10・11図）

調査区内においては、西寺山古墳の墳丘盛土は全て古くに削平された状態であり、平坦に整地されていた。断面観察によって認められた層序を、上層から順にみていこう。なお調査の掘削は、葺石残存部以外では基本的に地山面まで実施した。

既存本堂建設のための整地土は、暗褐色土に黄褐色土が混じり３層に分層できた（①・①’・①”層）。北から南への傾斜が認められ、南へ向かって厚さを増す。現存する墳丘から最も遠い第１トレンチ東壁の南端では、70cm程の厚さとなっている。このことは、墳丘削平の大部分が本堂建設のための整地や、県道建設時の土取りの際に行われたことを物語っている。

その下には、褐色や淡黒色を呈する墳丘崩落土が南へ傾斜して堆積している（②・③・⑤層）。厚い所で80cm程あり、葺石や裏込めの石材とみられる大小の川原石が密集する。暗渠溝ＳＤ１は②層上面から掘削され、その覆土は灰褐色を呈している（⑥層）。

墳丘崩落土の下、地山直上には部分的ではあるが暗灰褐色や灰褐色を呈する敷土が置かれる（④・⑧層）。墳丘を盛る際に、掘削しつつ地山を整形した後の整地土であり、墓道（陸橋状の通路）部や墳端石材下などに認められた。地山やこの敷土上には水が溜まったような土層の堆積は確認できず、周濠が存在した可能性には否定的である。

古墳築造に伴って掘削、整地された地山面は、墳端部から緩やかな傾斜で下る。周溝が存在する可能性を考えても、やはり否定的にならざるを得ない。この見解は、第１次調査の結果を追認するものである。地山は黄褐色を呈する中位段丘のシルト層で、礫を多少含むもののブロック状に離層するほどの硬さがある。

２．墳丘や外部施設（第７～11図）

今回試掘・発掘調査した場所は、西寺山古墳の消失した前方部南側墳端付近に当る。調査前には、前方部と後方部の接点であるくびれ部の検出も期待されたが、既に調査の試掘段階において、調査範囲がこの部分までには及ばないことが分かった。また、前方部南側の墳端ラインは、予想された角度よりもやや南へ開いて延びることも判明した。この結果、盛土は全て削平されつつも、検出できた古墳の墳端部分は約17mに及び、残存する基底部付近の葺石や裏込石の状態がよく把握できた。

遺存する葺石や裏込石は全て大小の川原石であり、墳端を明示する葺石の基底石はひときわ大きな石材が据えられている。これより上は、ひと回りかふた回り小さな石材が積まれて遺存するか、裏込の石材と見られる川原石が露呈している。裏込石も含めれば、基底石から数えて５－７段が遺存している。高さ的には、30－60cm程である。残存する葺石の据付は、所によって多少の敷土を挟むものの、ほぼ地山直上に密着して葺かれている。

また、墳端基底石より外方にもこの石と連続、密着して、明らかに敷土、もしくは地山面に置かれた（敷かれた）石材が認められた。この敷石部分は、広い部分で墳端基底石から外方へ約１mの幅を持つ。このような墳端外施設は、第１次調査の折にも前方部前面や北側くびれ部などでも確認されている。

墳丘の基盤は、中位段丘の地山を墳端に沿ってカットし墳丘側を平坦に、墳端部から外側をこれより低

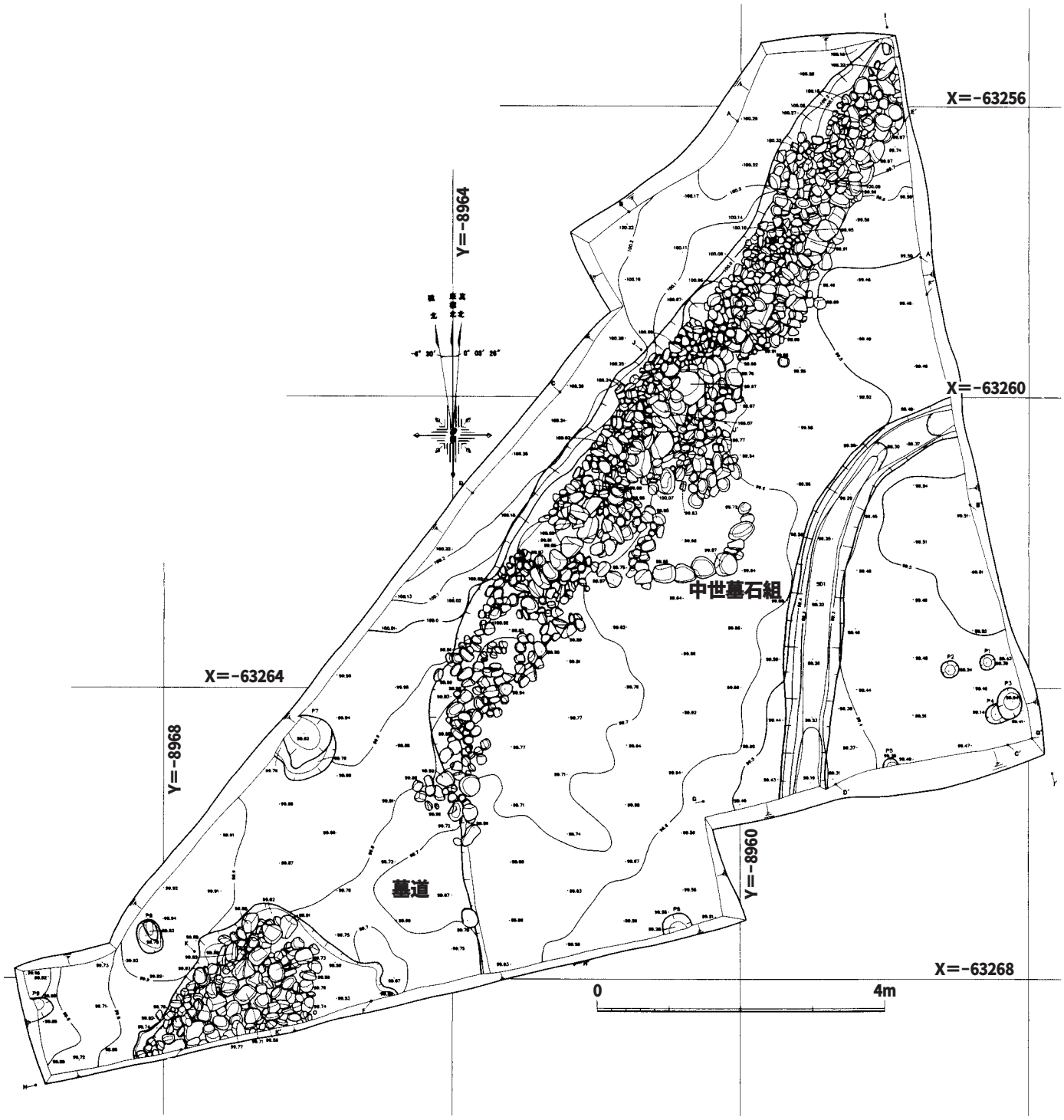


図７　調査区平面図

く平坦に整地している。墳丘側の地山整地面は、北東側で標高100.2m程度、南西端付近で99.9mの高さが残存していた。墳端より外側では、地山整地面は標高99.5〜99.8mを測り、その落差は50〜70cm程である。

３．通路となる陸橋部（第７・８・10図）

墳端を示す基底石やこれより上の葺石、裏込石、そして敷石石材の連続は、第４トレンチ辺りで途切れていた。途切れている幅は基底石ラインで約3.2mを測り、掘り残された地山の整形状態から見ても明らかに意図的な途切れ具合である。この葺石が途切れ掘り残された部分は、墳端ラインと直交して外方へ少なくとも３mは延びていた。この掘り残し部分上面の標高は99.7〜99.9mを測り、概ねフラットである。

この陸橋状を呈する部分が墳丘への通路であることは想像に難くなく、第１次調査の際に前方部端中央で検出された同様の陸橋部分とも重ね合わせれば、古墳への出入り口である可能性が非常に高いと考えられよう。

４．中世墓址ほか（第７〜11図）

第２トレンチを主体として、転落した古墳の葺石や裏込石の更なる撹乱が見られ、徐々に取り除いていったところ、撹乱部分の最下部から石組遺構が検出された。その間、この遺構を中心として（第１〜第２トレンチ）転落石に混じり、或いは地山直上の遺構に伴って多くの山茶碗（灰釉系陶器）類が出土しており、中世墓址と判断した。

明確な掘り込みは確認できず蔵骨器も出土しなかったため、火葬か土葬かの確定は避ける。また、明確な石組遺構としては１基だけであったが、関連遺物の量からみて複数の墓であった可能性もある。この遺構に伴って出土したものの中で図化できたものは、30、33、39、46、56、58、59、65、66、70、77であるが、第２トレンチを中心とした山茶碗類の多くがこれに関連するものと思われる。また、このうち基底部の石組遺構の間隙から地山面に接して出土したのは58（西）と66（東）であり、他の遺物も考え合わせれば、この遺構は丸石３号窯期〜明和１号窯期の時期に所属するものと考えられる。

基底部の石組遺構は、長辺1.6m、短辺１mが遺存し、直線的でやや開いた方形プランの二辺が確認できた。この石組は地山直上に組まれており、確実に山茶碗類を伴う。おそらく、古墳の墳端のおよそがまだ明確な中世の段階で、墳端部を選んで埋葬行為が行われたものであろう。

第一次調査の折にも、墳端付近を中心として設定した各トレンチから、ほぼ満遍なく山茶碗類が出土しており、よく似た状況であった。その際には蔵骨器とみられる古瀬戸や常滑の壺も出土している。おそらく中世の幅広い期間の中で、西寺山古墳上や墳端付近が墓地として利用され、土葬や火葬による多くの埋葬が行われたのであろう。

第１と第２トレンチの墳端外側で、東から西へ向かいその後南へカーブする溝（ＳＤ１）を検出した。溝底である地山面の標高は、東端で約99.4m、カーブの頂点付近で約99.3m、南端で99.16mと、緩やかであるが明らかに南へ向かって下っている。検出した長さは6.2m程である。溝の覆土は灰褐色土でよくしまり、その上部には葺石等の石材を利用して川原石が詰め込まれ、暗渠溝となっていた。東壁の土層観察では、この溝は初期段階の墳丘崩落土・石の上面から掘り込まれており、その底は地山にまで達している。

暗渠石材や覆土中からは、やはり山茶碗類が出土しており、近世に下る遺物は見られなかった。図化できたものは45（白土原１号窯期）と81（大畑大洞４号窯期）の２点である。上記中世墓址とさほど変わら

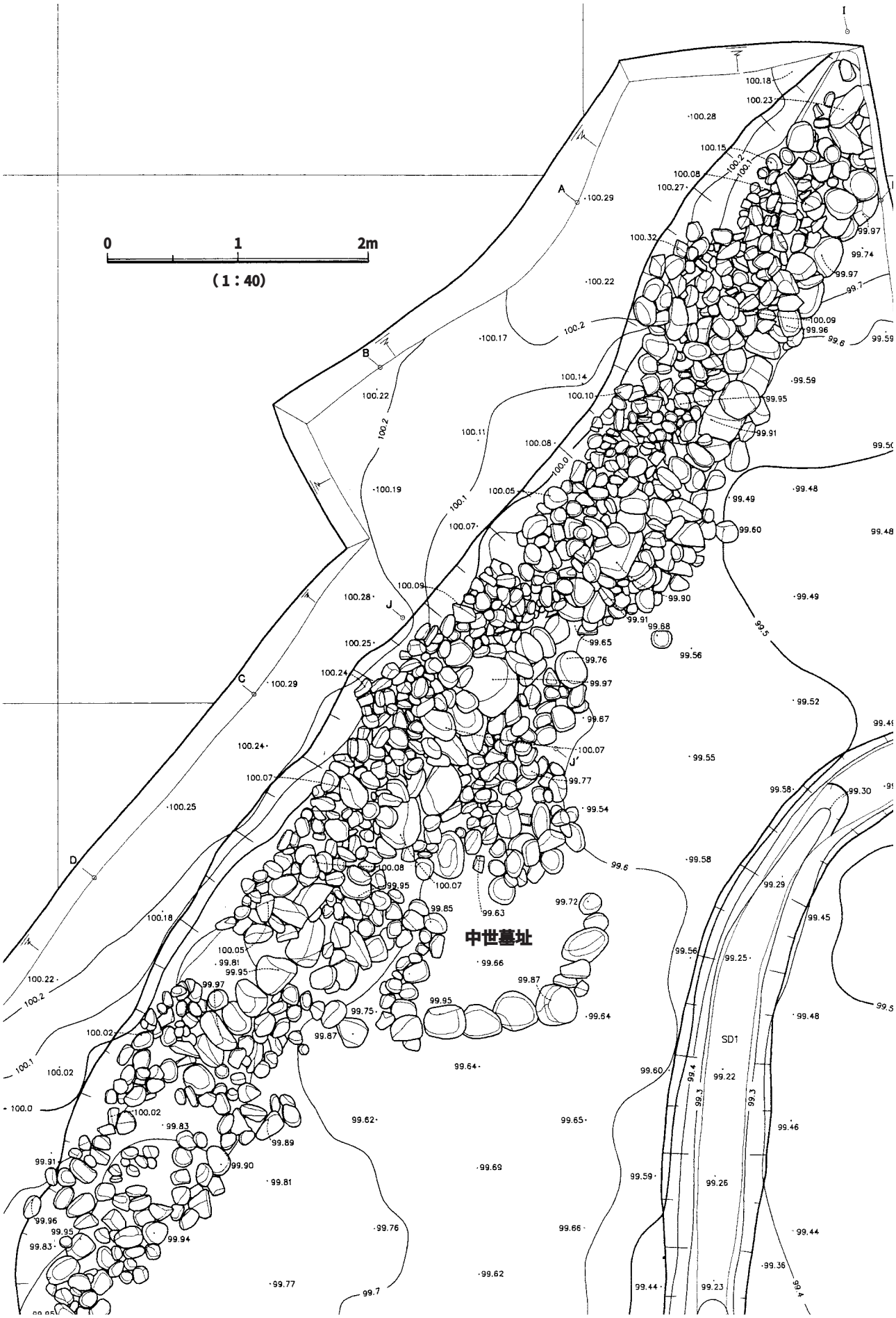


図8　葺石平面図（部分）

C
D
E
F
K
K'
O
P7
P8
100.24
100.0
100.25
100.18
100.05
99.81
99.95
99.97
100.22
100.2
100.02
100.13
100.1
100.02
100.0
100.01
100.02
99.83
99.91
99.90
99.95
99.96
99.95
99.83
99.94
99.94
99.62
99.3
99.95
99.88
99.77
99.79
99.76
99.88
99.92
99.88
99.71
99.89
99.81
99.71
99.96
99.86
99.72
99.91
99.89
99.8
99.7
99.72
99.60
99.87
99.9
99.92
99.91
99.76
99.67
99.62
99.86
99.91
99.69
99.69
99.94
99.83
99.7
99.78
99.88
99.76
99.75
99.75
99.58
99.82
99.73
99.59
99.63
99.73
99.87
99.59
99.76
99.67
99.59
99.52
99.71
99.76
99.74
99.82
99.74
99.71
99.55
99.77
99.85
0
1
2m
(1：40)

図９　葺石平面図（陸橋部）

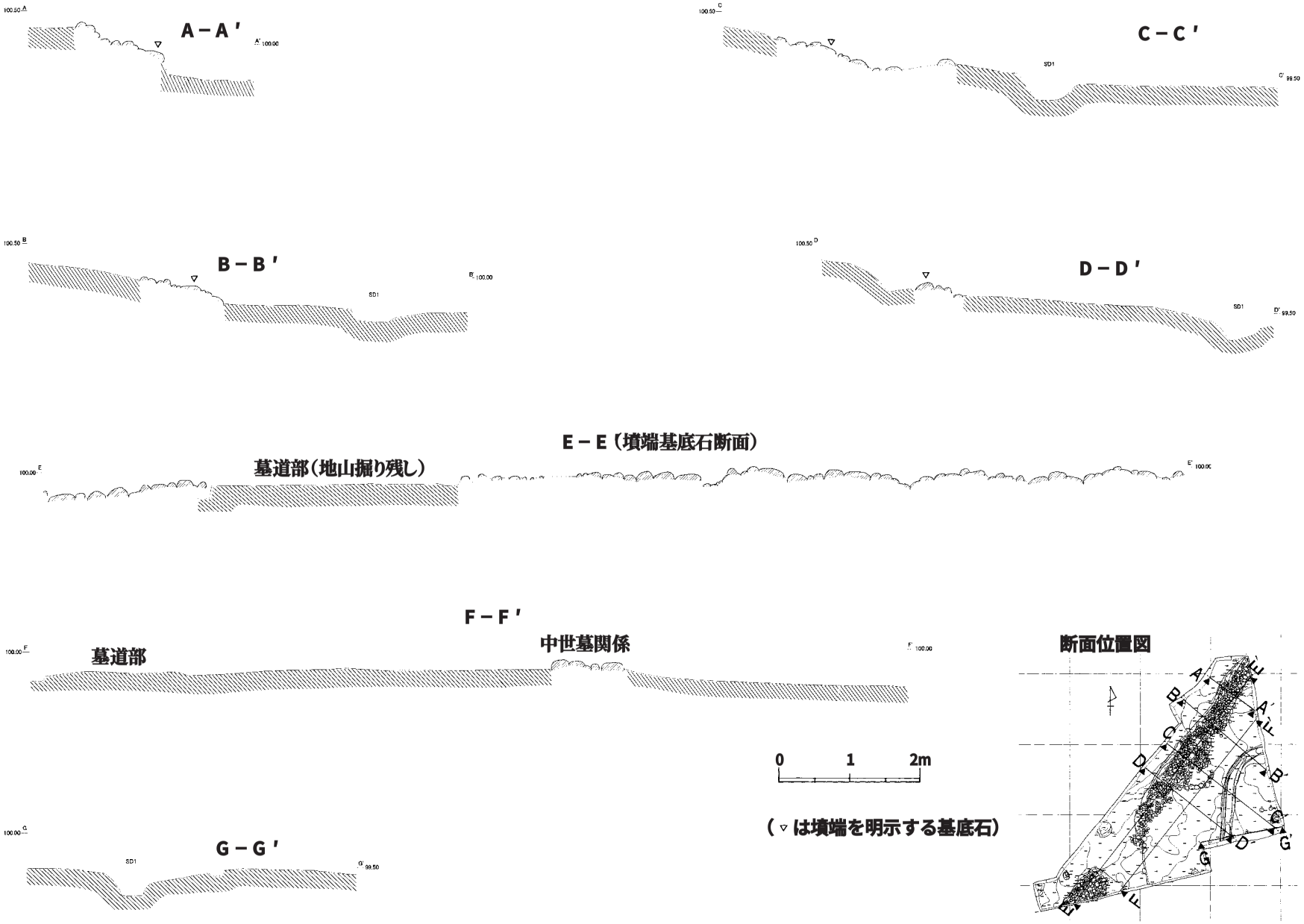


図10　墳端部の葺石断面図

ぬ時期の溝と考えられる。

その他、いくつかのピットが検出されたが、近現代の新しいものや時期不明のもの、中世の意味不明なものであり、古墳に直接結びつくものではなかった。

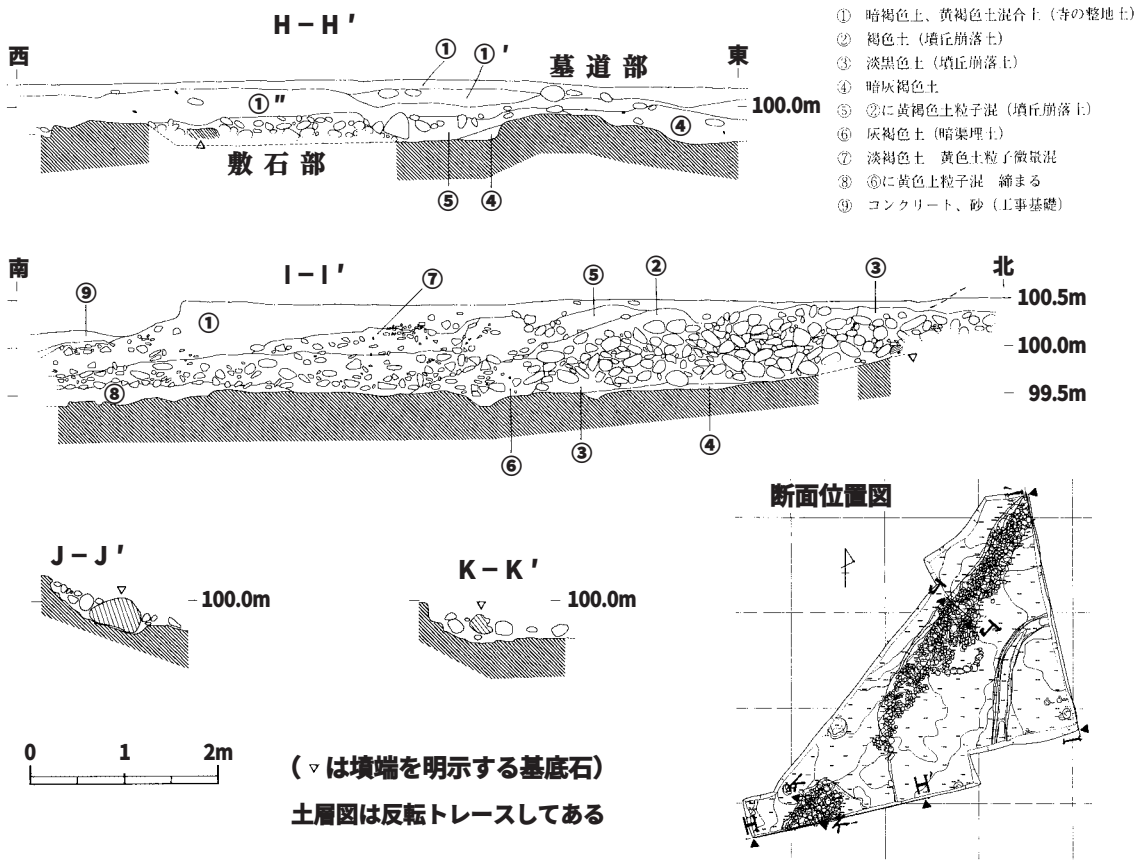


図11　墳端部断面及び土層図

第4節　出土した遺物

１．遺物の出土状況

葺石が転落し堆積した層の上部では、二重口縁壷形埴輪の破片が主に山茶碗類などの後世遺物に混じって出土し、下方では二重口縁壷形埴輪の破片が多量に出土した。大まかに分けて、この層の上方は旧本堂建設による墳丘削平、撹乱に伴う堆積と考えられ、下方はそれ以前の自然崩落による堆積と性格付けられよう。但し、第２トレンチを中心として出土した山茶碗類は、後世未だ古墳の改変が進まない頃、墳端付近に営まれた中世墓に伴うものである。

二重口縁壷形埴輪は、調査区の全域から破片が満遍なく出土している。概して、崩落した葺石の上下や原位置を保つ葺石の間隙から出土した破片は大きく、接合－復元－図化できた資料もそれらである。

出土した破片の総個体数は40個体以上を数えたが、図化に至ったものは11点に止まる。そのほとんどは小破片であり、口縁部から胴部にかけてのものである。底部の破片は見当たらない。このことからも、墳丘に立てられた際の元位置を保つものはなく、その全てが墳丘上部からの転落によるものとみられる。尚、西寺山古墳の築造そのものに関係した遺物は、この二重口縁壷形埴輪のみであった。

２．古墳に伴う遺物（図12、表1・2）

二重口縁壷形埴輪（１～11）

平成10年度に実施した第一次調査においても、全てのトレンチから同種の破片が多量に出土している。やはり底部の破片は極めて稀な状況であり、墳丘に立て並べられていたものが破損し、転落したものであることに疑いはない。またその際の報告（可児市教育委員会『前波の三ツ塚』1999）では、口頸部の形態や調整などから見て壷形埴輪の分類を行い、６種類を指摘している。今回の調査において出土した壷形埴輪についても、この分類の範囲内に収まるものであり、資料の突合せに矛盾をきたさないため、その際の分類に従って記載することにする。尚、今回「二重口縁壷形埴輪Ⅲ」としたものは、第一次調査における「その他」の部類においても明瞭ではないので、今回新たに分類した。

また、器面の保存状態が良いもので確認できるものの全てには、外面に赤色顔料が塗られている。明らかに赤彩されていないものはない。

（二重口縁壷形埴輪Ⅰ）１～７、９

頸部は長く直線的か緩やかに膨らみ、口縁帯は直線的もしくはやや外反ぎみに大きく開く。頸部との境は緩やかなカーブで屈曲するものと、明瞭な段で屈折するものがある。調整は内外面共に板ナデの後にナデを施す。器壁は１cm以下と比較的薄い。焼成は良好なものとあまいものがあり、胎土はきめ細かい。

口縁端部から頸部最下端まで復元できる資料が１のみであり、その他の資料については細分できる可能性がある。

（二重口縁壷形埴輪Ⅱ）10、11

胴部から直線的かつ開きながら立ち上がる頸部帯と、それに比べて短く外反する口縁部帯を持つ。屈曲部の下部は平坦で、粘土紐の継ぎ目から一見突帯状にも見える。調整は、内外面共に粗いハケと部分的なナデを施し、屈曲部は内外面共にヨコナデがなされる。器壁は厚めで、焼成はややあまいが胎土はきめ細かい。

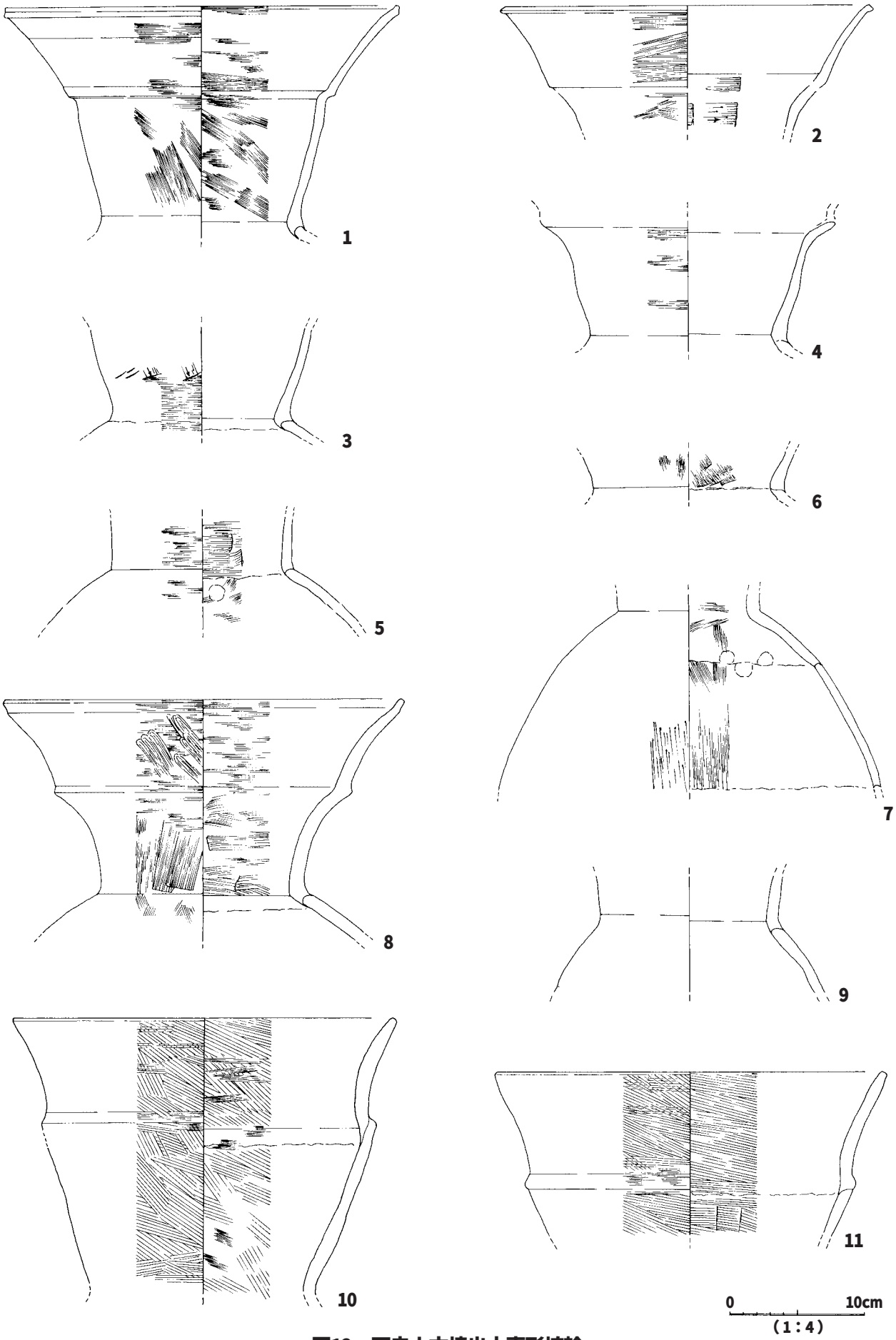


図12　西寺山古墳出土壷形埴輪

口縁帯の開く角度や長さに違いはあるものの、第一次調査におけるⅡ類に合致するものと見てよい。

（二重口縁壺形埴輪Ⅲ）８

胴部から強く外反しながら立ち上がる頸部帯と、外反しつつ大きく開く口縁部帯を持つ。頸部帯と口縁部帯の境は強いカーブを持って屈折し、調整は内外面共に各種のナデを施す。器壁は厚めであり、焼成は良好、胎土はきめ細かい。

３．古墳築造前後の遺物（図13・14、表３～５）

打製石斧（12・13）

３トレンチと４トレンチ内の撹乱層から１点ずつ出土した。何れも変成作用を受けた粘板岩製で、当地域通有のものであり縄文時代に属する。完形の12は、長さ12.3cm、幅3.9cm、厚さ1.1cmを測る。

弥生土器

１～４トレンチにかけて、弥生時代中期に属する土器の細片（貝田町式）が３個体程度パラパラと出土したにすぎない。

土師器甕（14・15）

古墳時代後期に属する土師器が２個体出土し、復元図化できた。一つは、１トレンチの崩落石を含む土層下部から出土した長胴の甕、もう一つは、５トレンチ内の同層中から出土した平底の小型甕（又は壺）である。

15の長胴甕は薄手で、推定口径17.2cm、推定胴部径24.7cmを測り、当地域通有の器形と調整である。14の小型甕は、器高19.9cm、口径10.0cm、底径7.5cmを測り、胴部外面のハケ目調整が荒く浅く厚手、その原体が特徴的であり、当地域ではあまり見られない器形と調整法である。いずれも６世紀末～７世紀前半の中に位置づけられよう。

16は土師質の管状土錘で、長さ4.9cmを測る。

須恵器

上記の土師器と同様、調査区全域の崩落石を含む土層下部から、10個体程度の細片が出土したにすぎず、図化にたえ得るものはない。内訳は次とおりである。

坏蓋（東山61号窯式期）、坏身（東山61号窯式期）、坏蓋（古墳時代後期）、坏身（奈良時代）、高坏（東山44～50号窯式期）が各１個体ずつで、甕（古墳時代後期）は３個体以上である。

白瓷類（17～28）

第２トレンチを中心として40個体程度が出土したが、図化できたものは碗類８点、皿類４点の合計12個体である。時期は、美濃白瓷編年の中頃部分（虎渓山１号～丸石２号窯式期）に属するものが多い。撹乱層の出土が中心で、明確な遺構に伴うものはない。

17と18は、美濃白瓷編年の前半部分である大原２号窯式期とみられる碗。19～24は、虎渓山１号窯式期に属する碗と皿類である。25と26は、中頃部分とみられる碗類。27と28は、丸石２号窯式期に属する碗類である。

実年代は、美濃白瓷編年の中頃である虎渓山１号窯式期の始まりが10世紀の中頃、丸石２号窯式期の終わりが11世紀の開始頃と考えられており（多治見市教育委員会『美濃窯の焼き物　特集写真で見る美濃焼の歴史』）、出土した白瓷の大半は10世紀の後半に当る。

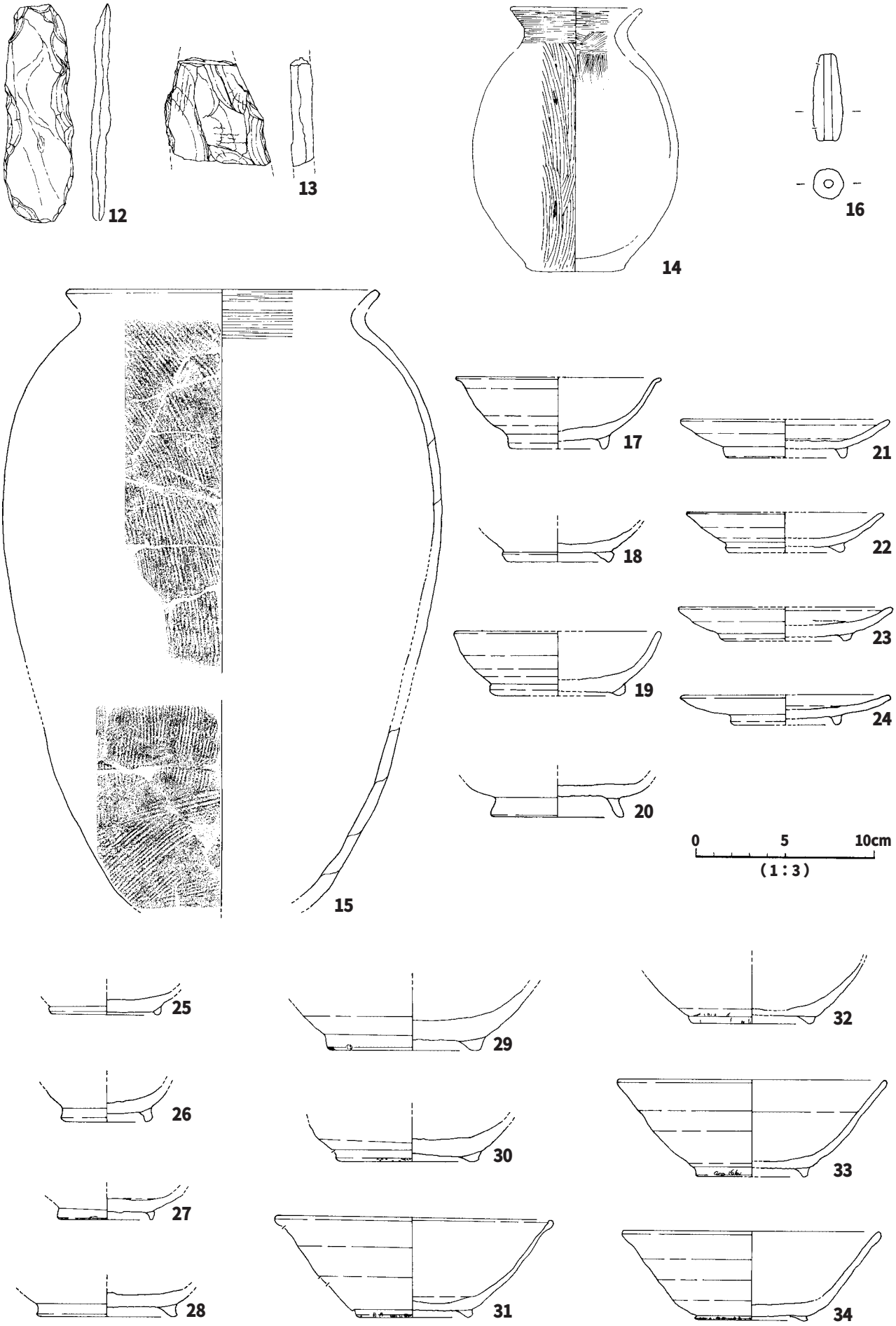


図13　古墳築造前後の遺物

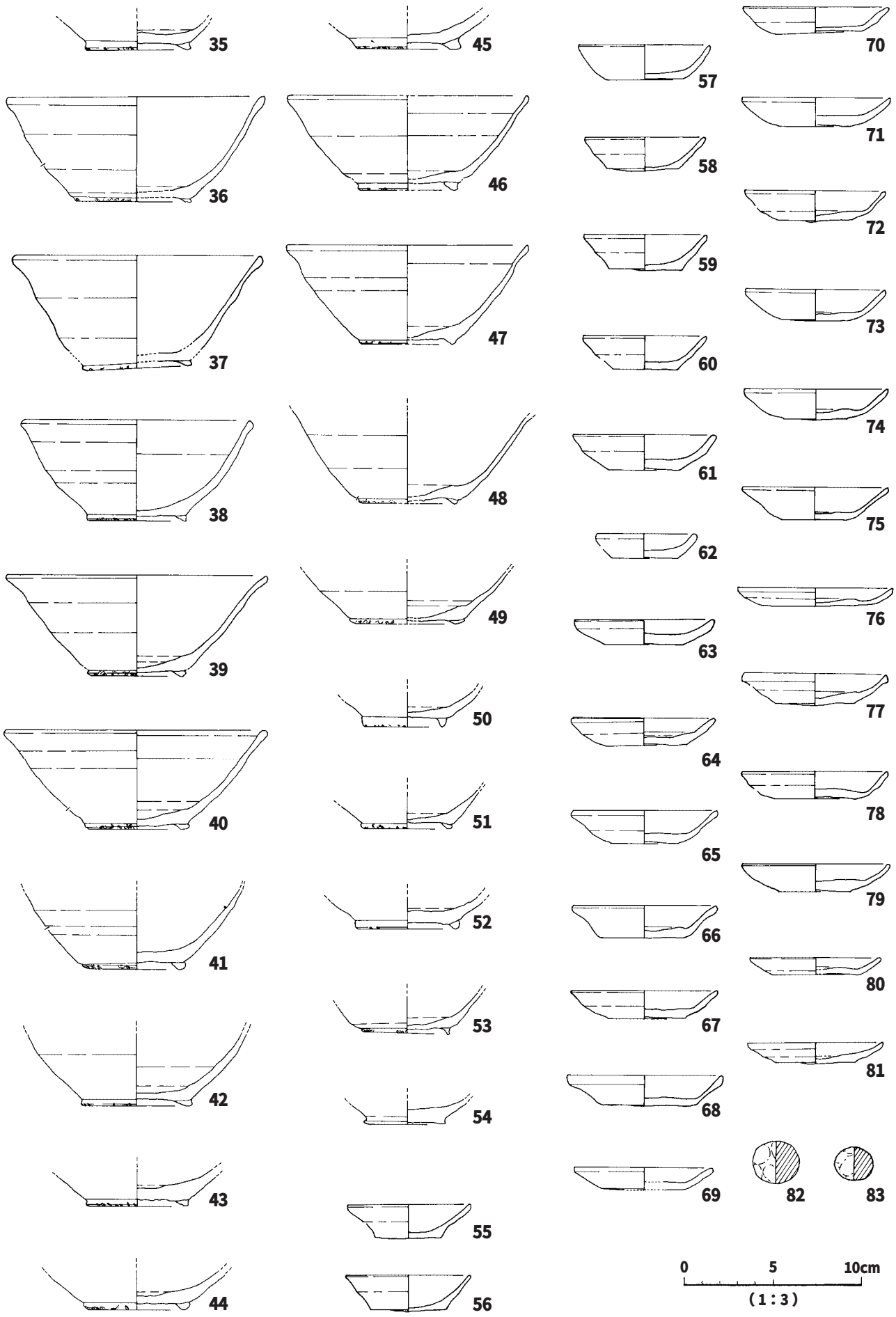


図14　古墳築造以後の遺物

その他、実測した遺物の詳細は表５遺物観察表に譲る。

山茶碗類（29～83）

第１～３トレンチ内を中心として、200個体を超える破片が出土している。出土場所の中心はやはり第２トレンチであり、石組遺構（中世墓址）とその周辺である。中世墓への副葬または供献の多さを物語っており、少なくとも数基の墓が存在していたものと推測される。

器種は碗と皿がほぼ半々で、ほとんど全てが北部系の山茶碗、他に陶丸が２点ある。時期的には美濃山茶碗編年のⅡ期（浅間窯下１号～窯洞１号窯式期）～Ⅲ期（白土原１号～大谷洞14号窯式期）にかけてのものが多く、その中心はⅢ期前半の白土原１号～明和１号窯式期にある。図化したものは55点に及んだ。碗と皿全ての外面底部には、ロクロ水引き後の切り離しの際についた回転糸切痕が残っている。

29と30は、数少ないⅠ期（谷迫間２号窯式期）に当る碗である。31～34は、Ⅱ期の範囲内に収まる碗、35はⅡ期またはⅢ期であろう。36～54は、Ⅲ期の範疇で捉えられる碗で、内面底の突起を取り去ったスリケシ痕や、外面高台内には（高台貼り付け前の乾燥過程における板状の敷物に由来する）板目状の圧痕が顕著である。55～63はⅡ期に、64～81はⅢ期に属する小皿である。やはり同様の手法で調整等がなされており、その痕跡が顕著である。

82の陶丸は長径2.6cm、83は長径2.1cmを測る。陶丸は、生産遺跡であるⅢ期の窯跡でしばしば出土しておりこの時期の所産であろうが、中世墓に伴うものであれば市内では本例が初見である。

実年代は、Ⅲ期前半の白土原１号窯式期の始まりが西暦1220年頃、明和１号窯式期の終わりが西暦1310年頃と考えられており（多治見市教育委員会『北小木古窯跡群』）、石組遺構（中世墓址）とその周辺から出土した遺物の多くは、13世紀前半～14世紀初頭に位置づけられよう。これはそのまま中世墓の年代を反映するものであり、13世紀代を中心とした埋葬とその後の供献祭祀を物語る。

その他、実測した遺物の詳細は表５の遺物観察表に譲る。

第5節　ま　と　め

復元される墳形など（図15・16）

今回の西寺山古墳の第二次調査により、前方後方墳の前方部南辺の状態が明らかとなり、多くの新知見を得るとともに従来の見解の見直しが必要になった。一見、墳丘の全てが削平された状況ではあったが、予想外に墳丘基底部の遺存状態は良く、墳端ラインがよく把握できた。

図15は、第一次調査の結果において作成された墳形の復元図である。これによれば、墳丘全長60.0m、後方部一辺の長さ34.0m、前方部長26.0m、前方部前端幅21.26mとされた（可児市教育委員会『前波の三ツ塚』1999）。当初はこの復元図を基に、前方部南側の墳端ラインを推定し試掘を開始したのだが、早い段階で墳端ラインがもっと南へ開くことが判明し、その後の調査区の設定を見直すこととなった。

この墳端ラインの角度修正に伴って以下の要素の見直しが必要となり、復元案を修正した。

①墳丘の主軸を後方部端で南へ約50cm、前方部端で南へ約１m下げ、主軸角度Ｓ－62°－WをＳ－60°－Wに修正した。

②北側のくびれ部位置から南側の同所を推定し、後方部の幅34.0mを37mに修正した。ただし、後方部の長さは変わらない。

③前方部の南側墳端ラインを基に、北側の推定ラインと前方部隅角の推定位置を見直し、前方部前端幅21.26mを34mに修正した。ただし、前方部の長さは変わらない。

以上のような修正を加えたものが、第16図に示す新たな墳形復元案である。イメージ的にかなり墳形が変わった印象である。その大きな要因は、主軸を修正し後方部が正方形ではなくなったことにある。後方部南側の墳端が確定していないため、今後とも修正の必要があろう。また厳密に言えば、この復元案では主軸に対して対称にはなっていない。南側くびれ部の位置により、主軸についても今後更に動く可能性があろう。

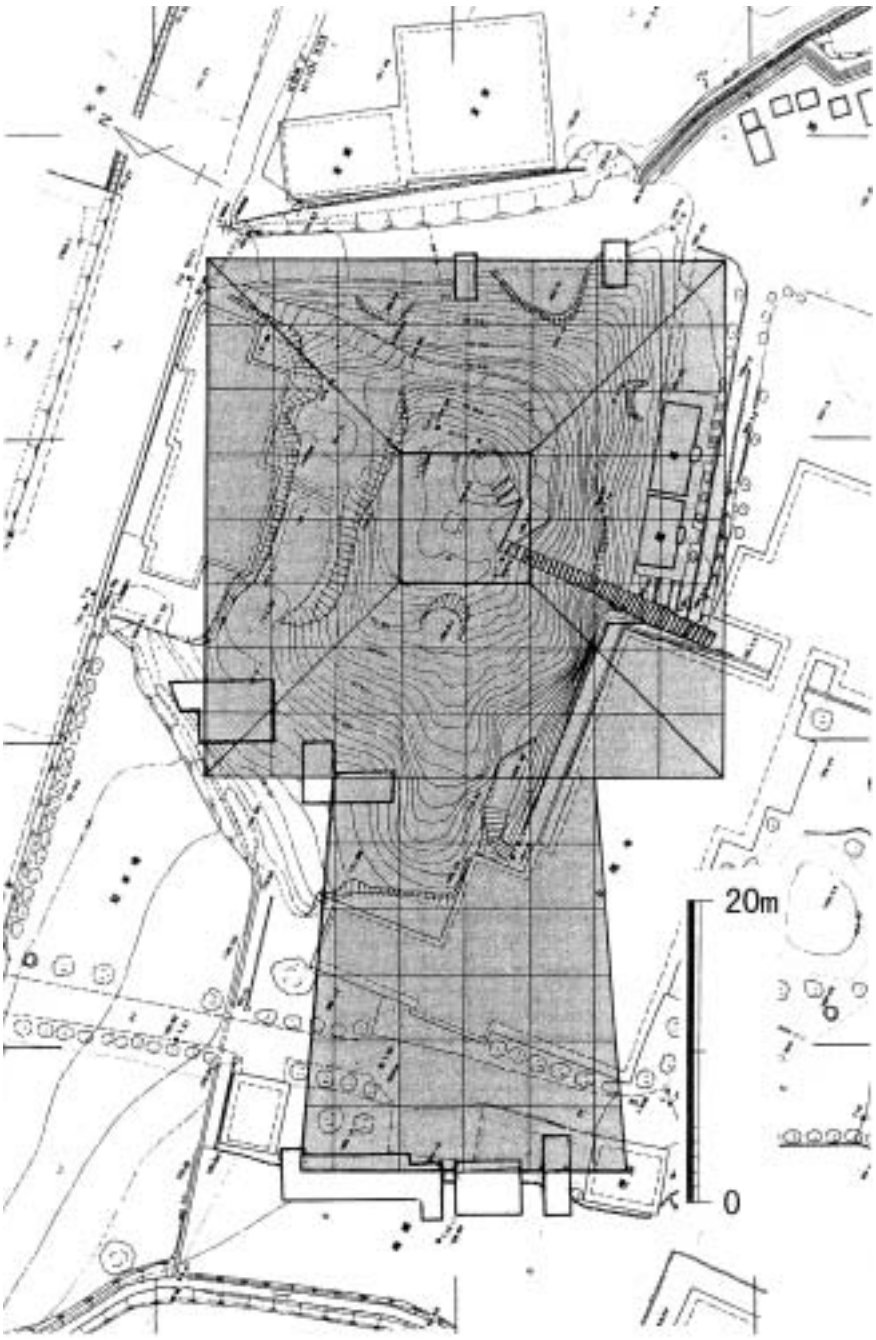


図15　第1次調査の結果による墳丘企画図

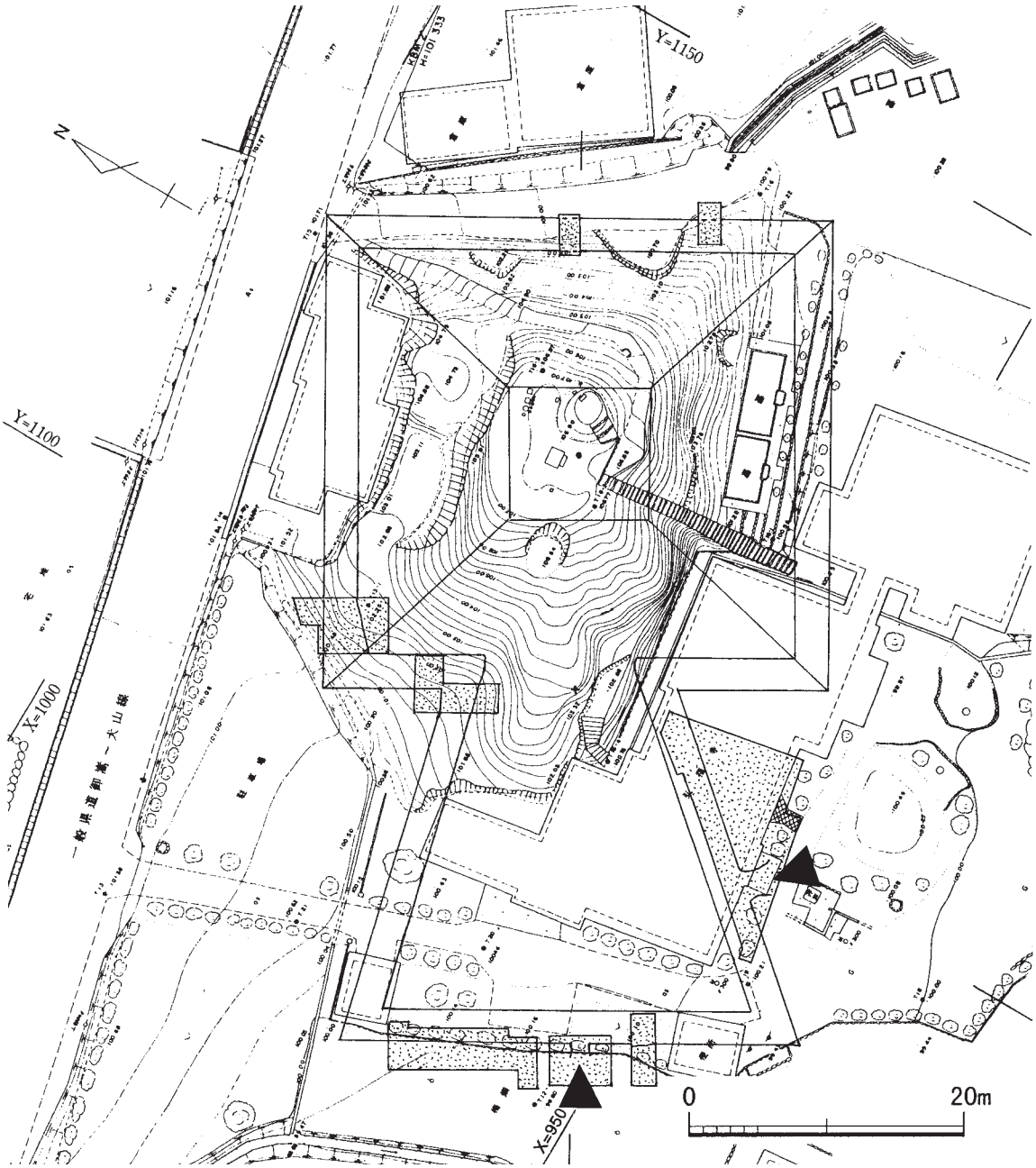


図16　西寺山古墳復元図

表１　古墳に伴う遺物観察表

（単位：cm）

No	名　称	出土場所	法　　量(cm)	赤　彩	色　調	調　　整	分　類	口縁帯	頸部帯	頸上段	器　壁
1	壷形埴輪	4T	口径復29.6、頸径推14.9	外面	淡褐色	ナデ（ヨコ、ナナメ、ヘラ）	Ⅰ	大開	緩膨	段	薄
2	壷形埴輪	2T	口径推27.8	外面	〃	ヨコナデ、ヘラケズリ	Ⅰ	〃		カーブ	〃
3	壷形埴輪	1T	頸径推13.2	外面	〃	ヨコナデ、ヘラケズリ	Ⅰか		緩膨		〃
4	壷形埴輪	1-2T	頸径推14.6	外面	〃	ヨコナデ	Ⅰか		〃	カーブ	〃
5	壷形埴輪	2T	頸径推13.5	外面	〃	ナデ（ヨコ、ナナメ、ヘラ）	Ⅰか		直立		〃
6	壷形埴輪	2-3T	頸径14.3	不明	〃	ナデ（ナナメ、ヘラ）	Ⅰか				〃
7	壷形埴輪	1T	頸径推10.6	外面	〃	ヘラケズリ、ナデ	Ⅰか				〃
8	壷形埴輪	4T	口径推30.0、頸径15.2	不明	〃	ナデ（ヨコ、ナナメ、ヘラ）	Ⅲ	大開	外反	カーブ	厚
9	壷形埴輪	5T	頸径復13.2	不明	赤褐色	不明	Ⅰか				〃
10	壷形埴輪	1T	口径28.6、頸径16.8	外面	淡褐色	ハケ、ナデ	Ⅱ	開	直線	平坦	〃
11	壷形埴輪	2-3T	口径復29.4	外面	〃	ハケ、ナデ	Ⅱ	〃	〃	〃	〃

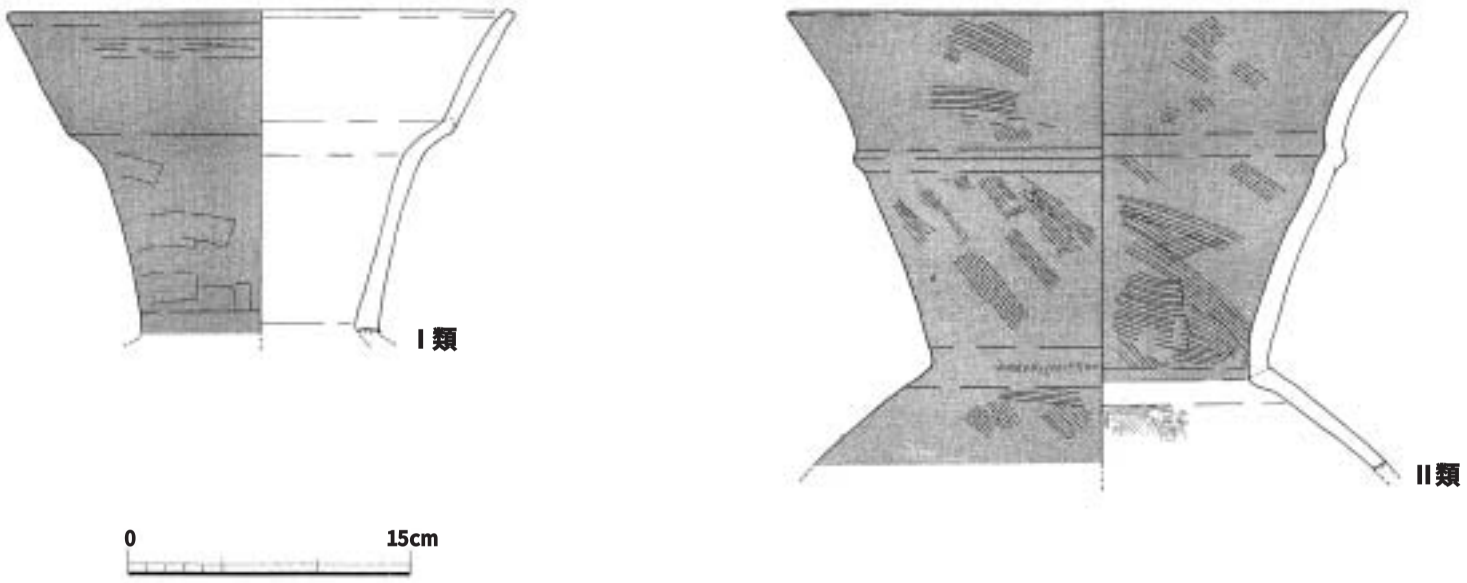


図17　二重口縁壷形埴輪の分類（一次調査）

表２　壷形埴輪出土個体数

（単位：個体数、↑は以上を表す）

トレンチ	ハケメなし		ハケメあり		小　計		合　　計
	図示個体	図化不能	図示個体	図化不能	ハケメなし	ハケメあり	
１Ｔ	2	4 ↑	1	1 ↑	6 ↑	2 ↑	8 ↑
２Ｔ	4	5 ↑		1 ↑	9 ↑	1 ↑	10↑
３Ｔ	1	4 ↑	1	1 ↑	5 ↑	2 ↑	7 ↑
４Ｔ	1	3 ↑		1 ↑	4 ↑	1 ↑	5 ↑
５Ｔ	1	8 ↑		1 ↑	9 ↑	1 ↑	10↑
小　計	9	24↑	2	5 ↑	33↑	7 ↑	40↑
合　計	33 ↑		7 ↑		40 ↑		

表３　古墳築造前後の遺物出土個体数

（単位：個体数、↑は以上を表す）

	打製石斧	弥生土器	土師器甕	須恵器				白瓷類	土師皿	山茶碗類	
				坏蓋	坏身	高坏	甕			碗	小皿
１Ｔ		3 ↑	1				3 ↑	5 ↑		26↑	18↑
２Ｔ					1	2		15↑	4	46↑	46↑
３Ｔ	1							9 ↑	1	20↑	18↑
４Ｔ	1			1	1			4 ↑	1	6 ↑	4
５Ｔ			1	1				4 ↑		5 ↑	1
表　採								1		13↑	3
小　計	2	3 ↑	2	2	2	2	3 ↑	38↑	6	116↑	90↑
合　計	2	3 ↑	2	9 ↑				38↑	6	206↑	

＊白瓷と山茶碗類の数は、主に底部破片から推定

表４　山茶碗類の時期別個体数

（単位：個体数）

	Ⅰ　期		Ⅱ　期		Ⅲ　期		Ⅳ　期
	谷迫間2号窯式期		浅間窯下1～窯洞1号窯式期		白土原1～大谷洞14号窯式期		大洞東1～生田2号窯式期
１Ｔ	1	0	2	0	19	7	
２Ｔ	3	0	8	9	29	32	
３Ｔ	2	1	9	5	3	5	
４Ｔ			4	2	1	1	
５Ｔ			1	1	2	0	
表採	3	0	3	0	5	2	
合　計	9	1	27	17	59	47	

＊主に底部破片から、時期区分可能な個体のみに限りカウントした
＊左の数は碗、右の数は小皿を示す

表５　古墳築造前後の遺物観察表

(単位：cm)

石　器

No	名　　称	出土場所	法　　量(cm)	色　調	石　材	特記事項
12	打製石斧	３Ｔ	長12.3、幅3.9、厚1.1	黒灰色	粘板岩	完形
13	打製石斧	４Ｔ	長(6.1)、幅(6.0)、厚(1.3)	〃	〃	破損

土師器

No	名　称	出土場所	法　　量(cm)	色　調	器　形	調　　整
14	小型甕(壷)	５Ｔ	口径推10.0、器高19.9、底径7.5	褐　色	平　底	ハケ、ナデ（ヨコ、ナナメ）
15	長胴甕	１Ｔ	口径推17.2、胴径推24.7	淡褐色	長　胴	ハケ、ナデ
16	土　錘	５Ｔ	長4.9、中央径1.7、孔径0.45	褐　色	筒　形	ナデ

白　瓷

No	名　称	出土場所	法　　量(cm)	色　調	窯　期	図化部残存率	回転糸切痕	反転図化
17	碗	４Ｔ	口径11.4、器高4.0、高台径5.2	灰　色	大原2	30%	○	○
18	碗	２・３Ｔ	高台径5.6	濃灰色	〃	60%	○	―
19	碗(灯明)	１・５Ｔ	口径11.4、器高3.6、高台径6.9	乳白色	虎渓山1	50%	○	○
20	碗	１・２Ｔ	高台径7.2	灰　色	〃	50%	○	○
21	皿	１Ｔ	口径11.6、器高2.1、高台径6.4	灰褐色	〃	40%	○	○
22	皿	２・３Ｔ	口径11.0、器高2.3、高台径6.3	〃	〃	40%	○	○
23	皿	２Ｔ	口径11.9、器高1.9、高台径6.7	灰　色	〃	30%	○	○
24	皿	１Ｔ	口径11.5、器高1.7、高台径5.8	〃	〃	20%	○	○
25	碗	５Ｔ	高台径5.9	乳白色	白瓷中頃	90%	○	―
26	小　碗	３Ｔ	高台径4.6	〃	〃	50%	○	○
27	碗	表採	高台径5.1	〃	丸石２	70%	○	―
28	碗	２Ｔ	高台径7.4	灰　色	〃	40%	○	○

山茶碗

No	名　称	出土場所	法　　量(cm)	色　調	窯　期	図化部残存	スリケシ	板目痕	反転図化
29	碗	１・5T	高台径8.2	灰　色	谷迫間２	70%			―
30	碗	２・3T	高台径7.4	〃	〃	70%			―
31	碗	５Ｔ	口径15.8、器高5.6、高台径6.2	灰褐色	丸石３	70%			―
32	碗	１Ｔ	高台径6.6	乳白色	Ⅱ　期	80%	○		―
33	碗	２Ｔ	口径15.0、器高5.4、高台径6.0	灰褐色	窯洞１	30%			○
34	碗	２Ｔ	口径14.4、器高5.0、高台径6.0	灰　色	〃	30%		○	○
35	碗	１Ｔ	高台径5.7	〃	Ⅱ～Ⅲ期	50%			―
36	碗	２Ｔ	口径14.5、器高5.9、高台径6.4	灰褐色	白土原１	50%	○		○
37	碗	２Ｔ	口径13.9、器高6.5、高台径6.2	灰　色	〃	50%	○	○	○
38	碗	１・3T	口径12.8、器高5.7、高台径5.5	〃	〃	40%	○		○
39	碗	２Ｔ	口径14.7、器高5.7、高台径5.1	〃	〃	30%	○	○	○
40	碗	２・3T	口径14.8、器高5.7、高台径5.3	〃	〃	50%		○	○
41	碗	１Ｔ	高台径5.1	〃	〃	80%		○	○
42	碗	１Ｔ	高台径6.0	〃	〃	40%	○		○
43	碗	１Ｔ	高台径5.5	〃	〃	60%	○		○

No	名　称	出土場所	法　　量(cm)	色　調	窯　期	図化部残存	スリケシ	板目痕	反転図化
44	碗	2・3T	高台径5.4	灰　色	白土原１	60%			○
45	碗	2 T	高台径5.5	〃	〃	80%			―
46	碗	1・2T	口径13.5、器高5.4、高台径5.4	灰褐色	明和1	10%			○
47	碗	2 T	口径13.6、器高5.6、高台径5.1	灰　色	〃	40%	○		○
48	碗	2 T	高台径5.3	〃	〃	30%	○	○	○
49	碗	2 T	高台径5.6	乳白色	Ⅲ　期	40%	○		○
50	小　碗	3 T	高台径4.4	灰　色	〃	60%	○	○	―
51	碗	5 T	高台径4.8	〃	〃	100%	○	○	―
52	碗	2 T	高台径5.5	〃	〃	50%	○		○
53	碗	2 T	高台径4.8	灰褐色	〃	60%	○	○	―
54	碗	5 T	(無高台)　底径4.5	灰　色	〃	100%			―
55	小　皿	2 T	口径 6.9、器高1.9、底径3.8	〃	丸石３	50%	○	○	○
56	小　皿	2 T	口径 7.1、器高2.1、底径4.4	〃	〃	30%	○	○	○
57	小　皿	2 T	口径 7.4、器高2.0、底径4.4	〃	〃	80%	○	○	―
58	小　皿	2 T	口径 6.8、器高1.9、底径4.2	〃	〃	100%	○	○	―
59	小　皿	2 T	口径 7.0、器高2.1、底径4.2	〃	〃	100%	○	○	―
60	小　皿	3 T	口径 7.0、器高1.9、底径3.7	〃	〃	50%	○	○	○
61	小　皿	4 T	口径 8.0、器高2.0、底径4.0	〃	窯洞1	40%			○
62	小　皿	3 T	口径 5.5、器高1.4、底径3.7	〃	〃	50%			○
63	小　皿	4 T	口径 7.9、器高1.4、底径4.5	乳白色	〃	40%			○
64	小　皿	2 T	口径 8.1、器高1.6、底径4.6	灰　色	白土原１	60%	○	○	―
65	小　皿	2 T	口径 8.2、器高1.9、底径3.7	〃	〃	50%	○	○	○
66	小　皿	2 T	口径 8.0、器高1.9、底径4.7	〃	〃	100%	○	○	―
67	小　皿	2 T	口径 8.3、器高1.6、底径4.5	〃	〃	60%	○	○	―
68	小　皿	2 T	口径 8.7、器高1.8、底径5.1	灰褐色	〃	70%	○	○	―
69	小　皿	1 T	口径 7.9、器高1.3、底径4.9	灰　色	明和１	20%	○	○	○
70	小　皿	2 T	口径 8.2、器高1.5、底径4.9	〃	〃	70%	○	○	―
71	小　皿	2 T	口径 8.4、器高1.7、底径4.1	〃	〃	40%	○	○	○
72	小　皿	2 T	口径 8.0、器高1.7、底径4.2	〃	〃	60%	○	○	○
73	小　皿	2 T	口径 7.9、器高1.8、底径4.0	〃	〃	80%	○	○	―
74	小　皿	2 T	口径 8.2、器高1.7、底径3.6	〃	〃	40%	○	○	○
75	小　皿	2 T	口径 8.4、器高1.9、底径3.8	〃	〃	30%	○	○	○
76	小　皿	1・2T	口径 8.8、器高1.1、底径4.7	灰褐色	〃	70%	○	○	―
77	小　皿	2 T	口径 8.1、器高1.4、底径4.6	〃	〃	70%	○	○	○
78	小　皿	2 T	口径 8.2、器高1.6、底径4.7	灰　色	〃	70%	○	○	○
79	小　皿	3 T	口径 8.2、器高1.6、底径4.1	〃	〃	30%	○	○	○
80	小　皿	1 T	口径 7.4、器高1.0、底径5.0	灰褐色	大畑大洞4	20%	○		○
81	小　皿	1・2T	口径 7.7、器高1.2、底径4.5	濃灰色	〃	30%			○
82	陶　丸	3 T	長径2.6、短径2.3	灰　色	Ⅲ　期	100%			―
83	陶　丸	2 T	長径2.1、短径1.8	〃	〃	100%			―

調査区全景（既設本堂取り壊し後）西から

同左　調査区設定（森は後方部）南西から

試掘調査開始　第１トレンチ（南から）

第１トレンチ精査

第１トレンチ内の墳端付近検出状況（南から）

同左　手前は墳丘側（北から）

同上　断面に見る葺石の崩落状況

同左　延長部分（東壁）

図版　2

調査区拡張中
（崩落した葺石の上面検出状況）北東から

同上　東側部分
中央は中世墓址の石組（南から）

同上　中央部分（南から）

調査区全景（崩落石を除去中）
南西から　写真左が墳丘

調査区の西側部分（同上）
北東から　写真右が墳丘

調査区の西側・陸橋部分（同上）
南西から　写真左が墳丘

図版　4

壺形埴輪８の出土状況

壺形埴輪の出土状況

壺形埴輪１の出土状況

壺形埴輪９の出土状況

葺石と敷石の清掃

中世墓址の石組と山茶碗小皿（58・66）の出土状況

SD1と中世墓址の上面（南から）

同左　完掘状況（南から）

完掘状況（東側部分）
西から　写真左が墳丘

完掘状況（東側部分）
南から　写真上が墳丘

同上　アップ（東側部分）南から

図版　6

完掘状況・葺石（東側部分）
東壁断面に見る崩落石の状況　南西から

完掘状況・葺石（中央部分）
南西から　写真左が墳丘

完掘状況（西側・陸橋へのくびれ部分）
南西から　写真下が陸橋部

完掘状況（陸橋部分）
東から　写真右上が墳丘

完掘状況（陸橋部分）
空中から　写真下が墳丘

完掘状況（陸橋・西側くびれ部分）
空中から　写真下が墳丘

図版　8

墳端の葺石基底石と裏込石（部分）南から

同左　（部分）東から

同上　（部分）南西から

同左　（陸橋くびれ部まで）南西から

陸橋部分の地山掘り残し（北・墳丘側から）

陸橋部分の地山掘り残し（西から）

SD1の覆土断面（南壁）

調査後埋め戻し（土嚢袋を敷き遺構を保護）

壺形埴輪１

壺形埴輪２

壺形埴輪３

壺形埴輪４

壺形埴輪５

壺形埴輪６

壺形埴輪７

図版　10

壺形埴輪８

壺形埴輪９

壺形埴輪11

壺形埴輪10

同上部分外面

同上部分内面

打製石斧12・13

土師器小型甕14

土師器長胴甕15

土錘16　白瓷17～20（左上下→右上下）

白瓷21～28（左上下→右上下）

山茶碗29～32（左上下→右上下）

山茶碗33～36（左上下→右上下）

山茶碗37～40（左上下→右上下）

山茶碗41～45（左上下→右上下）

山茶碗46～49（左上下→右上下）

山茶碗50～54（左上下→右上下）

山茶碗小皿55～63（左上下→右上下）

山茶碗小皿64～72（左上下→右上下）

山茶碗小皿73～81（左上下→右上下）

陶丸82・83

報 告 書 抄 録

ふ り が な	にしてらやまこふん
書　　名	西寺山古墳（２次）
副 書 名	
巻　　名	
シリーズ名	可児市埋文調査報告
シリーズ番号	39
編 集 者 名	長瀬治義
編 集 機 関	可児市教育委員会
所 在 地	〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
発行年月日	西暦2007年２月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地 名	コ ー ド 市町村	コ ー ド 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 面　積	調 査 原 因
にしてらやまこふん 西寺山古墳	かにしなかえど 可児市中恵土 あざてらまわり 字寺廻1944番	21214	04763	35° 25′ 50.5″	137° 04′ 5.75″	20041213 ～ 20050221 80㎡	寺院本堂建替え

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
西寺山古墳	古墳	古墳	前方後方墳の前方部側面墳端の葺石と墳丘への通路を確認	壺形埴輪、土師器、山茶碗	赤彩の二重口縁壺形埴輪の良好な資料

可児市埋文調査報告 39

書　　名　西寺山古墳（２次）

平成20年２月５日　印刷
平成20年２月15日　発行

編集・発行　可児市教育委員会
〒509-0292　岐阜県可児市広見一丁目１番地
Tel 0574-62-1111　Fax 0574-63-6751

印　　刷　丸理印刷株式会社